

出題分析			
試験時間	90分	配点	60点
		大問数	3題
分量 (昨年比較)	[減少] 同程度 増加]	難易度変化 (昨年比較)	[易化] 同程度 難化]
<p><b>【概評】</b></p> <p>昨年度と同様、大問数は3題で、全て読解問題である。下線部の内容や言い換えとしてふさわしい表現を選ぶ問題、空欄補充問題、内容把握問題などが出題されている。90分という試験時間に対しての文章量・問題量は依然として多く、時間配分に工夫を要する。しかし、昨年度より全体を通して長文が読みやすく、判断に迷う選択肢が減ったため、総合的に昨年度より易化したと言える。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	長文読解問題 (電子媒体閲覧時間を意識する必要性について)	内容(不)一致問題を中心に合計8問出題された。昨年度と比べて文章量は同程度であったものの、本文理解は比較的容易であった。また、設問は昨年度と比べて6問減り、本文の内容をストレートに問うものが多い。本問は素早く処理したい大問であった。	標準
II	長文読解問題 (パッケージの意義)	内容(不)一致問題を中心に合計11問出題された。昨年度と比べて1問増え、文章量も増加した。昨年度同様、正誤判断がつけやすい選択肢が多いため、英文を正確に読み、時間をかけすぎずに処理したい問題であった。	標準
III	長文読解問題 (言語におけるアイデンティティー)	内容(不)一致問題を中心に合計12問出題された。昨年度と比べて1問減り、文章量も減少し、また英文も論旨が分かり易くなった。他の大問と比べ、選択肢の細かい違いを検討する必要があるものが多く、より長い英文に注意を切らさず読み通す力が求められた。	標準

#### 合格のための学習法

年によって多少の変動はあるものの、教育学部の英語は読解問題を中心とした問題構成となっている。教育学部で出題される英文は標準的なレベルのものが多いが、近年は問題数の減少に伴って難化する傾向がある。まずは基本的な読解力を身につけることが重要だが、長い英文や語彙レベルの高い英文についても対策をすると良いだろう。また、英語の長文読解においては、文の内容に関する背景知識があると理解が容易になり、スムーズに読み進められることは言うまでもない。日頃から幅広いジャンルの文章を読みこなしておきたい。